

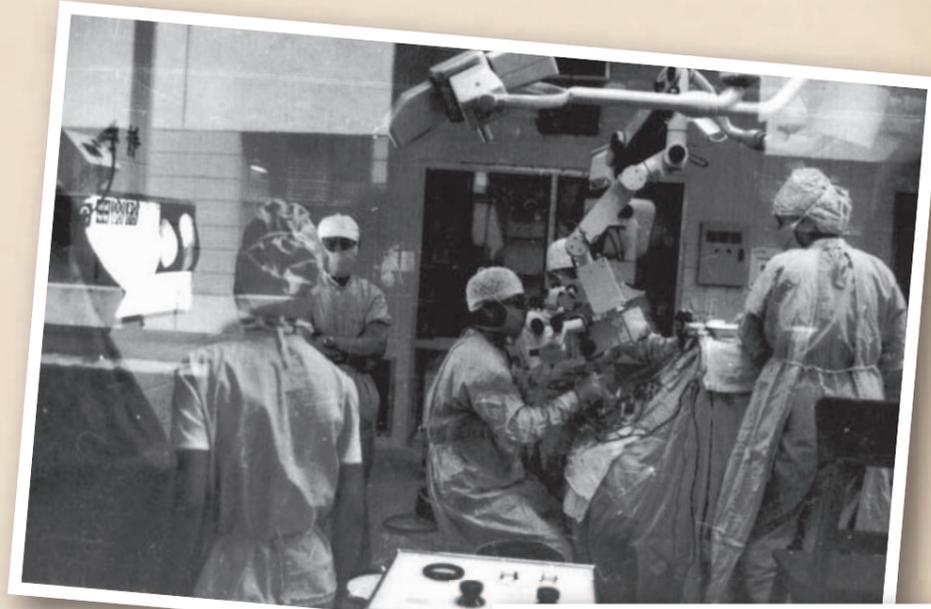
はだしの医師から 近代医療への道

日本から飛行機で約4時間、近年著しい成長を遂げる中国北京市。近代的なビルが立ち並ぶその姿は、世界最大の人口を擁する国の首都として圧倒的な存在感を示している。

その街の中心部から少し離れたところに、若干の古さは感じられるが、清潔感のある白い建物がある。看板には「中日友好医院」の文字が。その名の通り、中国と日本の友好の証として建てられた病院。病床数は1300床。シンボルマークには、富士山と万里の長城が描かれている。

日本に協力の要請があったのは、1966年から10年間続いた文化大革命が終結し、日中国交回復後の大平内閣の時代。当時農村人口が約8割を占めていた中国では、聴診器や薬箱を抱えた「はだしの医者」が、村々を駆け回り診療に当たっていた。そこで中国政府は、改革開放政策の一環として保健医療サービスの近代化を進めるべく、漢方を使った中国の伝統医学と西洋医学を融合させる場として新たな病院の建設を決定。日本政府は無償資金協力を通じて、その建設を支援することになった。

そして1984年、国民の期待を一身に背負い、清潔感のある真っ白な建物が北京市内に現れた。しかし当然のことながら、建物だけでは病院として機能しない。次に必要とされたのは、病院のマネジメントを



はじめ、医師や看護師たちへの技術指導だった。

そこでJICAは、日本全国の医師たちの協力を得て、中日友好病院の国内支援委員会を結成。日本人医師と看護師が交替で現地に赴き、カルテの書き方、患者への対応方法から、外来診療、手術のノウハウまでさまざまな技術指導を開始した。また、「百聞は一見にしかず」の言葉通り、日本



1980~90年代にかけて、日本人医師が技術指導。きめ細やかな支援が信頼関係を生んだ



両国から多くの関係者が参加した竣工式。近代的な医療サービスに対する期待が寄せられた

生命をつなぐ 友好のシンボル

中国北京市にある中日友好病院。1984年、日本の協力で建設されたこの病院は、長年にわたり病气やけがで苦しむ人々の助けとなり、今日では中国の先端医療の最前線を走っている。その基盤となっているのは、中国と日本の医療関係者が築き上げた技術力とホスピタリティーの精神だ。



History

次世代への財産

にも多くの中国の医師や看護師を招き、日本の医療現場での研修も並行して実施することになった。

共同研究を通じて さらなる技術向上を目指す

独立行政法人医薬品医療機器総合機構の理事長を務める近藤達也医師（当時は国立病院医療センター勤務）は、87年10月から約2カ月、脳神経外科では初めての専門家として現地に派遣された。「医師一人一人の能力はとも高かった。特に脳神経外科の左煥琮医師は日本の国立病院医療センターで研修を受けた経験もあり、顕微鏡手術

などの最新技術をすでに取り入れていました」と振り返る。開院から3年、脳神経外科では年間手術数がすでに1000を超え、順番待ちが出るほどの評判を得ていたという。

そこで近藤医師たちは考えた。中国の医師たちがさらに技術を磨く方法は、共同研究が最適だと。こうして、東京大学の高倉公朋教授と近藤医師、中日友好病院の左煥琮医師がチームを組み、中日友好病院を含む4つの中国の病院、3つの日本の病院の症例を使い、悪性脳腫瘍の放射線化学療法に関する研究が始まった。「日中間で初めて対等な立場で取り組んだ国際共同研究だったので、左先生は日本語も堪能で非常に熱心でした。最先端の技術に挑む姿は頼もしかったですね」と近藤医師は話す。

こうして日中の医療関係者が一致団結して築き上げてきた中日友好病院は、中国でも有数の総合病院としての地位を確立。2008年の北京オリンピックでは中国政府公認の病院に指定され、世界各国から集まった選手、コーチなど関係者の診察を一手に引き受けた。そんな今の姿があるのは、中国側の努力のたまものだと、現地に派遣された日本人専門家は口をそろえて言う。中国の医療関係者たちが描く、病院の姿があったからこそ、JICAも共に歩みを進めることができたのだ。「日本の協力を通じて、私たちはさまざまなことを学びました。医療サービスについてはもちろん、医師や看護師を含むスタッフが働きやすい環境づくり、人を通じたネットワーク構築など、すべてが私たちの、今」に生かされ



近藤医師をはじめとする脳神経外科チーム。共同研究のパートナー左医師とは、今も交流が続いている

ています」と同病院の尹勇鉄・国際協力課長は話す。

さらに今から6年前、日本で研修を受けた中国人医師の有志が集まり「JICA医療分野帰国研修員同窓会」を設立。日本で学んだことを自国により広く還元したいと、医療サービスへのアクセスが難しい農村部の人々への無料診療、地方の病院への技術指導のほか、08年5月に発生した四川大地震の被災地で医療活動を行っている。日本人医師たちが伝えたホスピタリティーの精神がここにも生きているのだ。

中国の医療関係者の人材育成の拠点にもなっている中日友好病院。日本との友好のシンボルが中国の人々の生命をつなぎ、発展している姿は、私たち日本人にとっても大きな励みとなっている。



現在は高層ビルが立ち並ぶ北京市にも、1980年代はのどかな風景が広がっていた。背後に見える白い建物が中日友好病院

中日友好病院の医師たちが中心となって、四川大地震の被災地(上写真)や農村部(下写真)で無料診療活動を実施している

